

平成二八年度 二松學舎大学資料展示室 企画展図録

三島中洲と近代 其四

— 小特集 戦争と漢学

平成二八年度 二松學舎大学資料展示室 企画展図録

三島中洲と近代 其四

— 小特集 戦争と漢学

三島中洲と近代 其四 ―小特集 戦争と漢学

―目次―

I 三島中洲の対外認識 5

―幕末期の三島中洲による写本類から

―中洲が詠じた対外戦争

―三島中洲の詩箋から

―呉汝綸と中洲・二松學舎諸氏の集合写真

II 対外戦争の記憶から危機意識へ（江戸期） 11

―元寇

―朝鮮出兵

―海防問題

―琉球処分

III 対外侵出の時代（明治期） 15

―日清戦争

―日露戦争

―紀行文

IV 対外侵出の時代（大正期・戦前） 19

―第一次世界大戦後の世相と漢学

―漢文教材にみる対外戦争

V 山田方谷の対外認識と国体論 24

―大島友之允との交流

―山田準（専門学校初代校長）の講演原稿から

VI 戦時下の二松學舎 26

―那智佐典（専門学校二代校長）の式辞原稿から

―敗戦後の状況

VII 対外戦争・対外危機等を詠じた詩文とその書 28

凡例

一、本書に収録した資料のうち、二松學舎大学所蔵資料には、請求記号・整理番号等を略記し、それ以外（個人蔵）には通し番号の前に☆を付した。

二、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。

三、人物の呼称は基本的に姓号を用いるが、汎用される姓名等を用いた場合もある。

四、図版解説は、町泉寿郎・川邊雄大・武田祐樹が次の通り分担執筆した。町 no.1～14, 36, 37, 44～58, 川邊 no.22, 29, 35, 38～43, 武田 no.15～21, 23～28, 30～34。

五、本書は二松學舎大学の大学資料展示室の企画展「三島中洲と近代 其四」(5/23～6/25)の展示図録を兼ねるものである。

はじめに

二松學舎大学 文学部教授 町 泉寿郎

三島中洲（一八三一～一九一九）の九〇年に近い生涯が、東アジア地域の国際関係における激動の時代であったことはことさらに言うまでもない。

その間において、中洲自身に限ってみても、一昨年の『三島中洲と近代 其二』において「三島中洲と対外関係」を立項して言及したように、中村義氏の言葉を借りるなら、幕末の開国論から明治期以降に攘夷論に変身してしまったかのような対外認識の変容があった。

中洲の幕末明治期の対外認識を考えるには、まず彼が師事した山田方谷や斎藤拙堂の影響を考慮する必要があるのは言うまでもないし、京坂や江戸で交友した儒学関係の師友と、そのほかに備前・備中・備後・美作の箕作一族や原田一道のような洋学者も含めた関係者を視野に入れる必要がある。

また、漢学塾二松學舎の初期の生徒たちには、陸軍士官学校・海軍兵学校への進学者も多かったといわれているが、その実態やその後の學舎との関係などは従来あまり明らかにされていない。

今回の企画展「三島中洲と近代 其四」では、近代日本の儒者・漢学者たちの対外認識を考える前提として、対外的緊張の結果としての戦争を、儒者・漢学者がどのように叙述しているのかを、関連する著作や詩文・書画を通して見てみたいと思う。

三島中洲（みしま ちゅうしゅう）略伝
(1831.1.22 天保元年 12 月 9 日 - 1919.5.12)

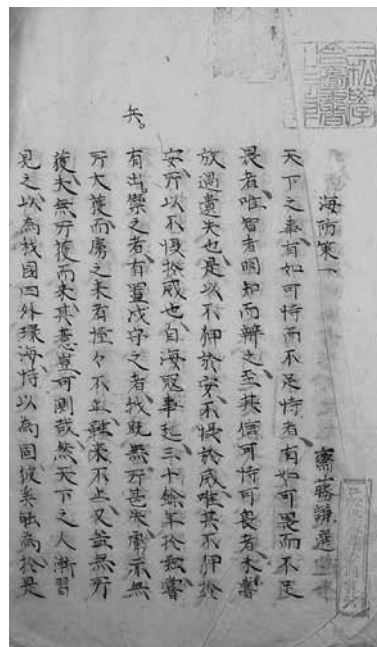
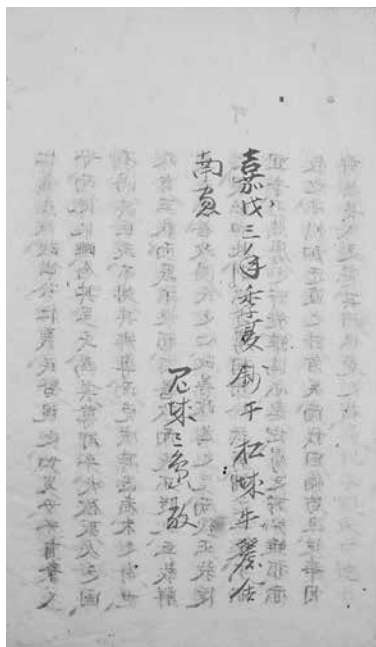
名は毅（つよし）、通称は初め広次郎後に貞一郎、字は遠叔、別号は桐南・中洲等。遠祖は備中成羽城主三村家親の二男上田実親。実親敗死後、その男澳伝次郎吉親が備中窪屋郡中島村に帰農し、その女を三島氏に娶せたので、後に三島姓に改め（元三島）、その一族から中島村の庄屋を出した。中洲の生家西三島は、元三島五代吉充の長男吉長を初代とし、祖父伝太郎正武の代から庄屋を務めた。中洲はその男寿太郎正昱と浅口郡大谷村の大庄屋で暦算家の小野光右衛門（1785～1858）の長女柳の二男として中島村に出生。祖父・父は新見藩儒丸川松隠に儒学を学び、山田方谷はその同門に当たる。八歳の時、父が江戸出張中に客死。隣村西阿知の丸川龍達に句読を学び（1840）、次いで備中松山藩の山田方谷に入門（1843）。砲術を学ぶため津山藩の天野直人を訪うた方谷に同行（1847）。学業進捗して繁務の方谷に代わって方谷家塾に代講（1850）。更に研学のため津藩の斎藤拙堂に遊学（1852～56）、この間、川北梅山の好意により藩校有造館蔵書を借覧し、博く清朝學術を学ぶ。米使ペリーの浦賀再来を聞き探索に出かけ、『探辺日録』を著す（1854）。清国漂流船の志摩漂着事件に際し『屯兵策』を著す（1855）。帰郷した中洲を方谷の意を帯びた進鴻溪が訪い、その勧めに従い備中松山藩仕官（1857）。江戸に遊学して安積良斎・安井息軒・塩谷宕陰らを歴訪（1857）。林復斎に入門し、昌平黌書生寮に入り佐藤一斎・安積良斎らに学ぶ（1858～59）。同窓に岡千仞・南摩羽峰・広沢安任・重野成斎・股野藍田・松林飯山らがあった。帰藩し、大小姓格・有終館会頭となる（1859、禄 50 石）。昌平黌に再遊し詩文掛となる（1860～61）。帰藩して吟味役・有終館学頭となり、家塾虎口溪舎を開く（1861）。老中となった藩主板倉勝静の密命を受け西国諸藩の探索に出かけ、長崎の清人林雲遠、熊本の竹添進一郎らと情報交換し、『西国探索録』『観風餘稿』『瓊浦筆談』を著す（1862～63）。攘夷決行を迫る孝明天皇と逡巡する幕府の間に立ち、方谷と共に老中勝静の君側にあつて補佐し、攘夷決行による朝幕対立の回避や（1863）、長州の攘夷を褒賞することによる第二次征長の収拾などを説いた（1866）。奉行格・洋学総裁となる（1867）。鳥羽伏見敗戦後、岡山藩兵による鎮撫使を家老とともに迎え、備中松山城下の開城につき交渉（1868）。東北戦争のため行方不明の藩主父子に代わり、新たに板倉勝静を迎えてこれを補佐した（1869）。勝静父子の自首と勝弼の高梁藩知事就任を見届け、致仕（1870）。廃藩置県まで一時期、板倉家の家令となる（1870～71）。勝静が禁錮を解かれた後、旧友玉野世履・鶴田皓等の推薦により、司法省七等出仕の徵命を受け（1872）、権少判事となり新治裁判所長（73～74）、東京裁判所（75）、大審院民事課に勤務（76）。大審院判事廃官により、漢学塾二松學舎を開設し（1877）、明治 10 年代には司法省法学校・陸軍士官学校・東京大学古典講習科等への進学者を輩出した。加藤弘之の委嘱により東京大学講師（1879）、同教授（1881～86）となり、漢文を講授。朝士視察団崔成大と司法制度に関して筆談（1881）。黎庶昌・黄遵憲ら清国公使館員らとも交流した。東京学士会院会員（1885）。大審院検事となり民法草案の修正に従事（1888～90）。判事に転ずるが休職、以後、風流判事を自称した（1890）。再び帝国大学講師を短期間勤め（1895～96）、川田甕江の後任として東宮侍講となり（1896）、晩年まで大正天皇に近侍して進講し漢詩を添削した（～1915）。文学博士（1899）。川田が完成せず没した木戸孝允神道碑の撰文を継承して成稿（1910）。宮中講書始にしばしば進講（1899、1900・02・06・10・11・14）。晩年、親交のあった渋沢栄一に二松學舎の運営を託した。

I 三島中洲の対外認識 — 幕末期の三島中洲による写本類から

文章家として著名な伊勢津藩儒の斎藤拙堂（1797～1865）は、一方でアヘン戦争に衝撃をうけて海防や経世に関する著作を刊行する側面を持つ、国際情勢に高い関心を寄せた儒者である。中洲が備中松山藩での修学時にすでに斎藤拙堂の『海防策』（資料2）を筆写していることから、中洲の拙堂従学の原因をその文名に魅かれたとだけみることはできない。拙堂の著作のほか、中洲およびその周辺（阪谷朗廬など）で筆写された塩谷宕陰・大槻西磐ら日本人の著述は未刊のものが多く、幕末書生たちの間にこれらの海外情報が写本によって共有されていた様子を物語る。『海国図志』『遐邇貫珍』など海外の刊行物からの情報も少なくない。

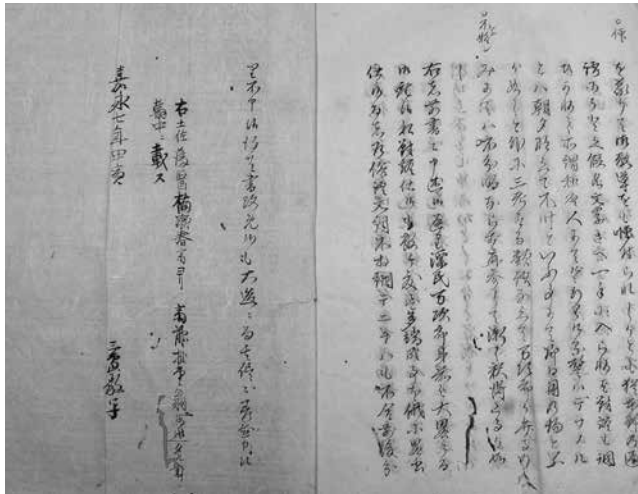


1. 斎藤拙堂『魯西亞通略始末』写本仮綴1冊
（『魯西亞記略』より抄出、三島213）



2. 斎藤拙堂『海防策』（『海防五策』）写本仮綴1冊（三島215）

巻末に、嘉永3年（1850）6月、20歳の中洲が山田方谷の家塾牛麓舎で筆写した旨の識語がある。「鬼城」は三島家の遠祖上田実親の居城であった総社市の鬼身城のこと。



3. 『万次郎漂話』 写本仮綴1冊（嘉永7年=安政元年〈1854〉筆写、三島214）

三島中洲の識語によって、この写本が土佐藩医楠瀬春斎から斎藤拙堂に送られた書簡から筆写されたものであることがわかる。土佐出身の漂流民万次郎の記録については、中洲はこの年の正月、再来したペリー艦隊の探索のために江戸に出たおりに、藤森弘庵のもとで借覧している（『探辺日録』）。



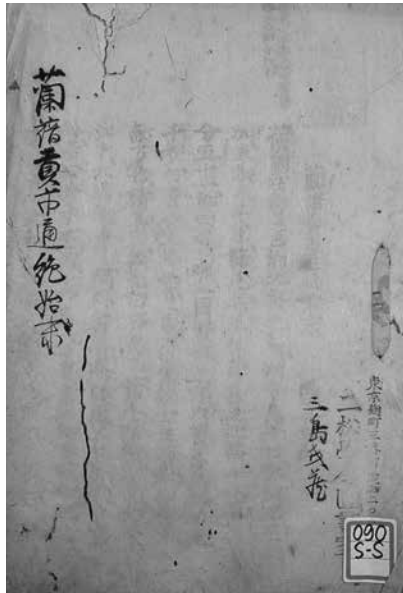
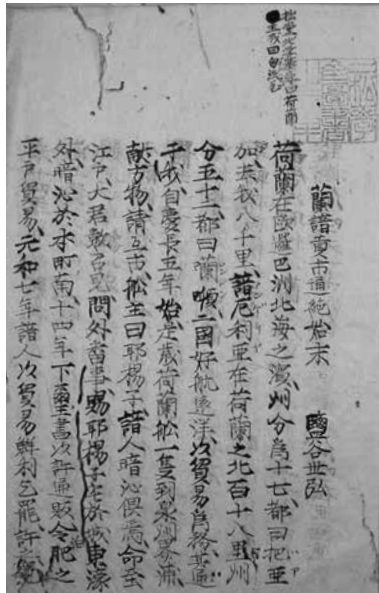
5. 大槻西磐『外蕃略表』 写本仮綴1冊（三島218）

大槻西磐（1818～1857、名は清禎、通称恒輔）は仙台の儒者大槻清臣の次男、大槻平泉の甥。昌平坂学問所に学び江戸で開塾。洋学者と交わり、海外情勢に詳しかった。本書は寛永12年から嘉永6年（1635～1853）の日本の外交・通商に関する年表、未刊に終わった。



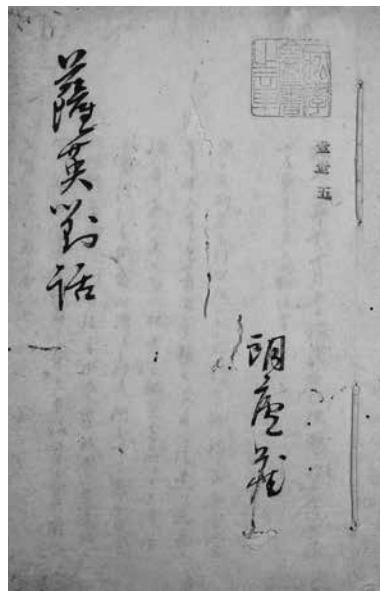
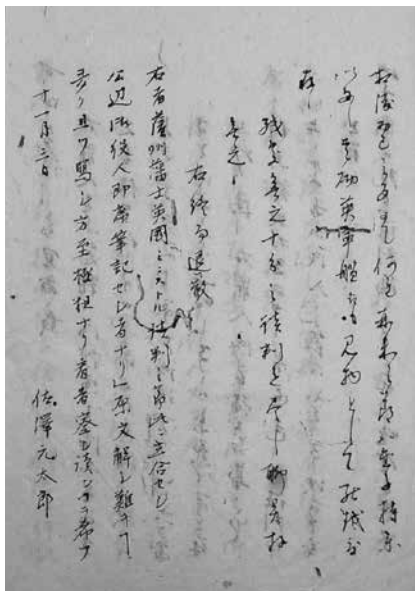
4. 東洋鯤叟『北陸杞憂』 写本仮綴1冊（三島217）

文化3年（1806）9月、ロシア海軍士官レザノフが樺太の日本人居留地クシュンコタンに来寇し、北辺の緊張が高まった。本書は寛政から文化におよぶ日露関係を記述したもの。東洋鯤叟は著者大塚唯助の別号。



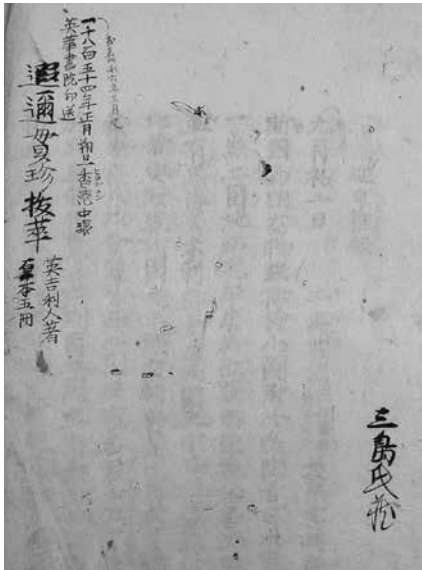
6. 塩谷宕陰『蘭語貢市通絶始末』写本仮綴1冊（三島 212）

江戸生まれの儒者塩谷宕陰（1809～1867）は、水野忠邦に仕え、後に安井息軒・芳野金陵とともに昌平坂学問所の儒官になった。本書は、江戸初期からフェートン号事件に至る江戸時代の通商・外交を、オランダ（蘭）とイギリス（諳）の関係を軸に説く。中洲は、オランダの首都の名称について、拙堂の地理書『地学挙要』の説を上欄に引用している。



7. 『薩英対話』写本仮綴1冊（阪谷朗廬旧蔵、三島 109）

文久3年（1863）9・10月に行われた生麦事件の処理をめぐる薩摩藩と英国の交渉（英国代理公使ニールと薩摩藩士重野安繹ら）の記録。本書に記された10月5日の交渉内容は軍艦買い入れに関するもの。同年11月3日に福山藩士・洋学者の佐澤元太郎が筆写した旨の識語がある。表紙の題字は阪谷朗廬の筆跡で、その所蔵であったことがわかる。



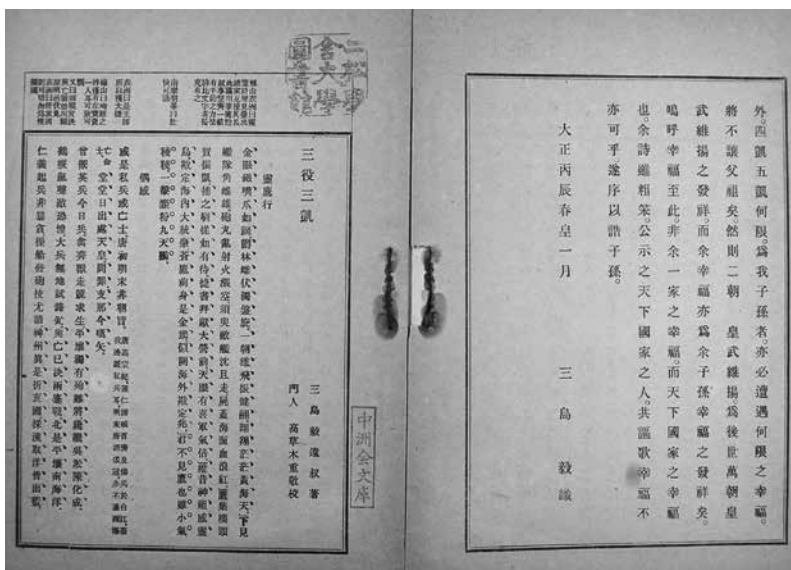
9. 『遐邇貫珍拔萃』写本仮綴1冊
(三島39)

香港で刊行された中国語月刊誌『遐邇貫珍』からの抜粋。クリミア戦争のことなどを抄出している。



8. 『海国図誌拔萃』写本仮綴合綴1冊
(三島37)

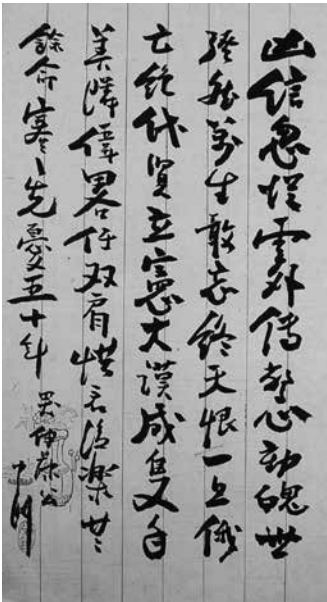
清・魏源撰『海国図志』からの抜粋。「籌海篇」「彌利堅洲部」「印度国部」「夷情備采」「北洋俄羅斯国部」「北洋欧羅巴洲」の部分抜粋している。



10. 三島中洲『三役三凱』(大正5年〈1916〉1月序刊、法人 図書0036)

「三役三凱」とは、日清・日露両大戦および第一次世界大戦において、日本が清国、ロシア、ドイツと戦い、三度とも勝利したことを指す。幕末維新期の対外的緊張をくぐり抜けてきた中洲らの世代にとって、対外戦争の勝利は「人生ノ至大幸福」に他ならず、本書はこの幸福を肉親や学孫などの親しい人々と分かつために作られた。

— 中洲が詠じた対外戦争 —



13



12



11

11. 「甲辰十一月旬一日觀菊御宴恭賦時征露軍在滿洲」

(明治 37 年 〈1904〉 11 月 11 日、三島 F5-133)

「恩寵又陪觀菊宴 君臣相悅詠清秋 寄言閩外諸營將 奮鬪休須內顧憂」。『三役三凱』等に未収録。

12. 「哭兒玉大將」(明治 39 年 〈1906〉 7 月 23 日 兒玉源太郎歿、三島 F8-206)

「絕世知謀驚鬼神 旻天驀地奪斯人 出師已勝身何惜 猶使英雄淚濕巾」。

13. 「哭伊藤公」(明治 42 年 〈1909〉 10 月 26 日 伊藤博文歿、三島 F8-203)

「凶信忽從雲外傳 驚心動魄世駭然 萬生敢忘終天恨 一旦俄亡絕代賢 立憲大謨成隻手 善隣偉略任双肩 惜君後樂無餘命 蹇々先憂五十年」。

明治 20 年前後、中洲は鹿鳴館に象徴されるような伊藤博文や井上馨らの露骨な欧化政策に対して、明らかに嫌悪感を持っていた。しかし明治 29 年 (1896) に盟友川田甕江 (1830 ~ 1896、名は剛) が亡くなった後、その後任として宮内省御用掛・東宮侍講を拜命したころから、長州閥の政治家・軍人との交流が深まったと考えられ、詩文にも伊藤春畝の名が散見するようになる。従来、薩摩閥の重野成斎に対して、その対抗軸としての長州閥の川田甕江という構図があり、中洲は重野とも良好な関係のまま、長州閥との関係を手にした。日清・日露両大戦に関しては、『三役三凱』の著作にもみられるように極めて肯定的で、先師方谷が幕末期に抱いた「遠略」の実現ともとらえている。



14. 吳汝綸と中洲・二松學舎諸氏の集合写真 (明治35年〈1902〉7月6日撮影、新出資料)

北京の京師大学堂総教習となった吳汝綸(1840～1903)は教育状況視察のために来日(6月28日東京到着、10月22日帰国)。写真は中洲主催による歓迎会が富士見町の富士見軒で開かれ、二松學舎出身者20人余りが出席した時のもの。吳汝綸が学問を講じた保定の蓮池書院には二松學舎出身の野口多内が学んでおり、事前に相互の情報があったと考えられる。この日の雅集の様子と席上交換された詩文は雑誌『教育界』1巻10号や『二松學友會誌』(明治36年5月)に収録されている。

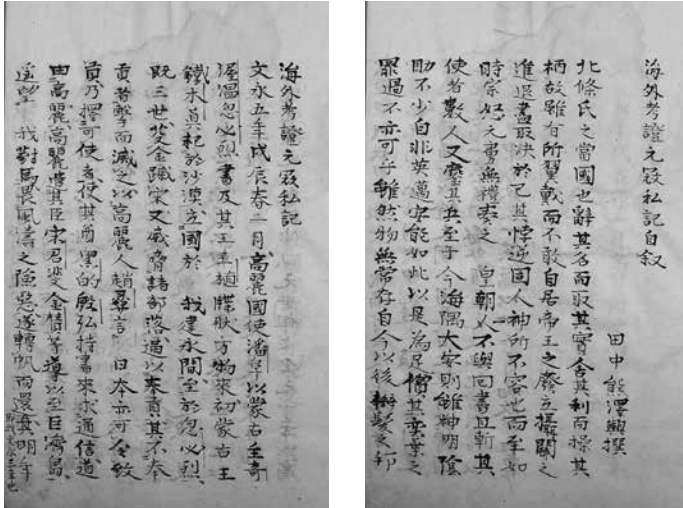
前列右から：佐倉孫三、入江為守、紹英、吳汝綸、三島中洲、藤井幸槌、細田謙蔵

二列目右から：富塚德行、橋本武、久保田鼎、笠井彰、平林鶴吉、田畑大蔵、那智佐典、岡田起作、小川明太郎

三列目右から：斎藤良一、池田四郎次郎、池田精一、三島復、堀内伊太郎、小豆沢英男、久保靱次郎、中島裁之

II 対外戦争の記憶から 危機意識へ（江戸期）

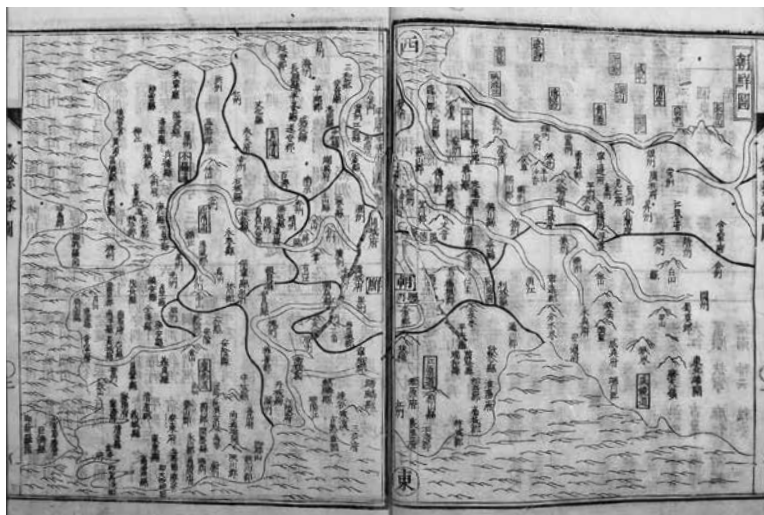
—元寇



15. 熊沢惟興『海外考證元寇私記』写本1冊（芳野521）

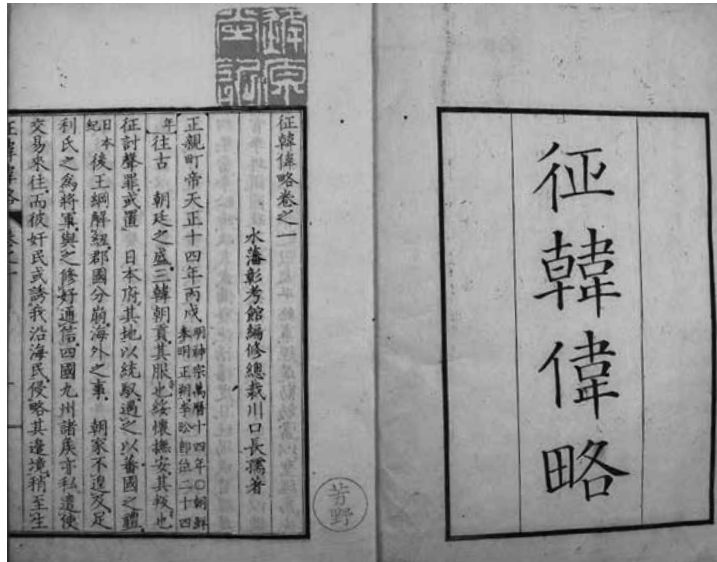
元寇の顛末に国外資料を対照させたもの。嘉永元年（1848）芳野金陵序あり。芳野金陵旧蔵写本。熊沢惟興（1791～1854、字は伯熊。通称は太郎）は田中藩校日知館教授。すでに小宮山昌秀（1764～1840）『元寇始末』がより豊富な資料に基づき出典を明記して元寇を描いたが、本作は記述を簡略にし、『東国通鑑』と『元史』の記事を対照させる。外敵が現れた時に元寇が振り返られ、過去に学ぶ姿勢が生まれるのである。

—朝鮮出兵



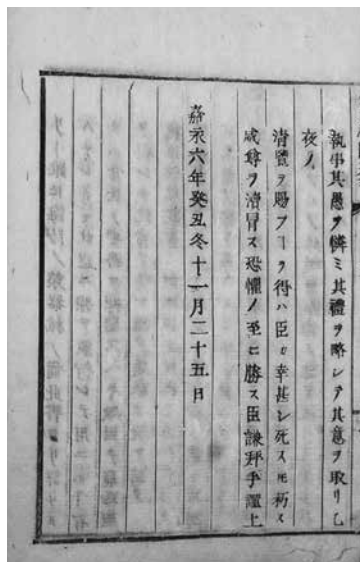
16. 柳成龍『懲毖録』4巻4冊（芳野290）

朝鮮出兵の朝鮮側の記録。元禄8年（1695）刊本。芳野金陵旧蔵。柳成龍（1542～1607、字は而見、号は西厓）は李滉（1501～1570）に学び、朝鮮出兵の際、中央政界の要職にあった。軍備の怠慢が日本の侵略と国土荒廃を招いたという認識の下、後世を戒めるために著され、作品内で柳成龍自身も批判の対象となる。国外流出して出版され、朝鮮で物議を醸すが、日本では朝鮮出兵に関する重要資料として重きをなした。



17. 川口長孺『征韓偉略』5巻5冊（芳野 24）

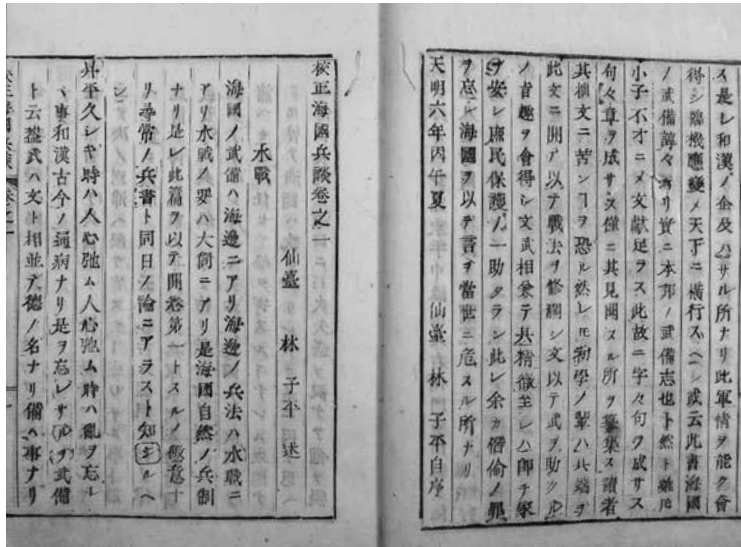
朝鮮出兵を、国内外の資料を用いて描いたもの。天保2年（1831）刊本。芳野金陵旧蔵。川口長孺（1773～1835、字は嬰卿、号は緑野）は水戸藩士。彰考館総裁と水戸藩第6代藩主徳川治保（1751～1805）の侍講を兼ねる。日本の立場からではあるが、朝鮮出兵時の歴史的事実を『懲愆録』等の国外資料を用いて考証する。当時の朝鮮と19世紀日本を重ね合わせ、侵略される側の動向や心理を学ばんとした事が伺える。



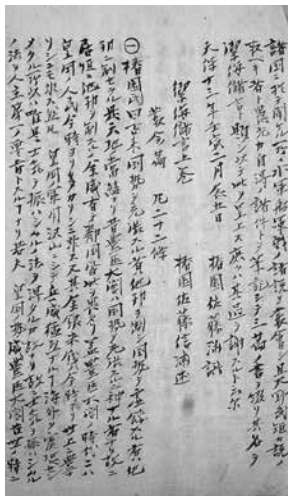
— 海防問題

18. 林子平『海国兵談』10巻10冊（新取資料）

海防の必要性を説く兵書。嘉永6年（1853）序刊。林子平（1738～1793、名は友直、号は六無斎）は経世家。北方海域におけるロシアの進出を憂い、寛政3年（1791）に出版するも、出版物取締令に抵触。翌年には蟄居処分となり板木も没取される。展示品は少部数を活字印刷したもの。



18. 林子平『海国兵談』卷首



20. 佐藤信淵『禦侮儲言』写本1冊
(芳野 194)

日本の水軍研究の不足と水軍充実の必要性を説く海防書。天保12年(1841)成立。芳野金陵写本。佐藤信淵(1769～1850、字は元海、通称は百祐、号は椿園など)は経世家。ロシアとイギリスを仮想敵国として、両国の科学技術と軍事力の優越性を認めた上で、その打倒を目的に掲げる。西洋の大艦に勝つためには、多数の小舟による連携と大砲の運用が有効であると唱え、鄭氏台湾の軍がオランダ軍船を撃破した例を引く。



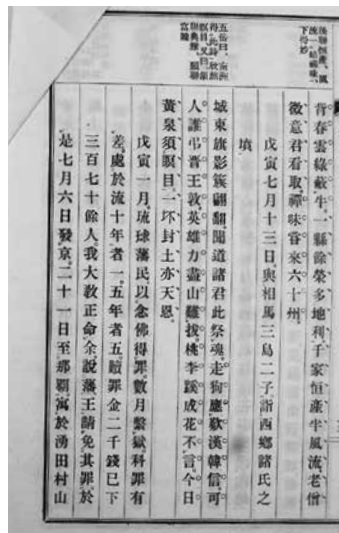
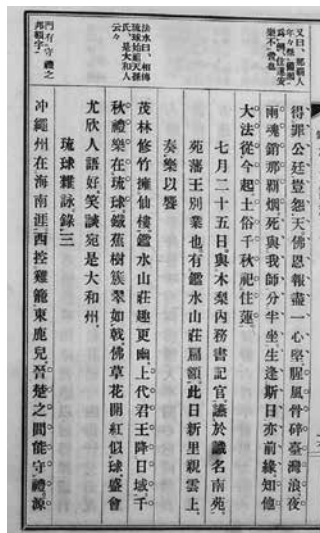
19. 頼山陽「佛郎王歌」
(『山陽詩鈔』、和 p114 上 4)

ナポレオン(1769～1821)を題材に取った韻文。七言古詩。文政元年(1818)成立。『山陽詩鈔』は漢詩人である頼山陽(1780～1832、諱は襄、字は子成)の自選漢詩集。天保四年刊本。九州旅行中に、ロシア遠征従軍経験者のオランダ人医師から聞いた話に拠り、ナポレオンの名を日本に広める契機となる。西洋列強の領土欲に対する警戒心が顕著であり、漢学者の対外認識が未だ感情的なレベルにあったことを示す。



21. 塩谷宕陰『隔鞞論』1巻1冊（芳野534）

海防書。安政6年（1859）刊。塩谷宕陰（1809～1867、諱は世弘、字は毅侯）は松崎憐堂（1771～1844）の弟子であり、浜松藩主水野忠邦（1794～1851）の家臣。アヘン戦争における清の敗北を成立の契機とする。清が西洋列強に敗れた原因を探り、論じる。非常に高い視点に立ち、明がマカオにポルトガルの居留権を与えたことから説き起こし、最終的には漢学を西洋人に広めなければならないと説く。

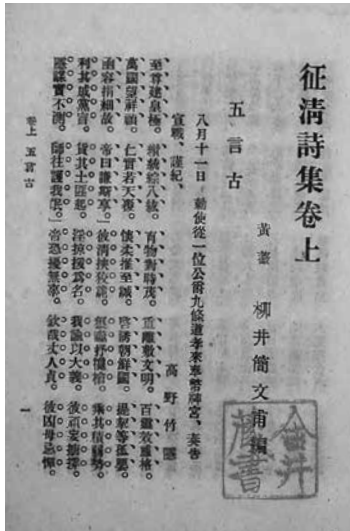


— 琉球処分

22. 小栗布岳『布岳懐旧詩史』2巻2冊（新取資料）

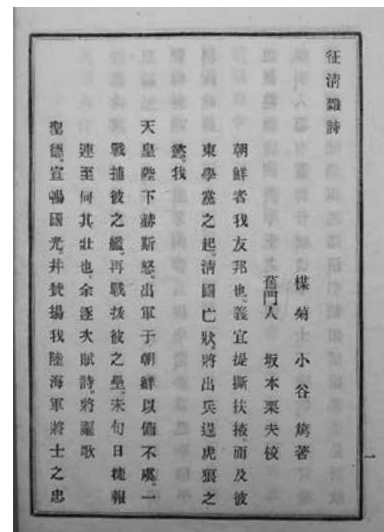
大正2年（1913）刊本。小栗憲一（1834～1915、号は布岳）は豊後出身の僧侶で、幕末期に漢学塾・咸宜園に学び、維新後は松本白華とともに玉川吟社・香草吟社に所属するかたわら、宮内省・教部省・大蔵省等に出仕した。明治10年（1877）に琉球で発生した真宗法難事件においては、同11年に東本願寺の代表として琉球藩庁との交渉にあたったが、政府の介入もあり同12年に信者は釈放され、同年に琉球藩は消滅し沖縄県となった。なお、小栗は日露戦争に際して堪忍袋の画を一千枚描いて戦費として寄附している。

III 対外侵出の時代
 一 日清戦争
 (明治期)



☆ 23. 柳井綱斎編『征清詩集』2巻1冊

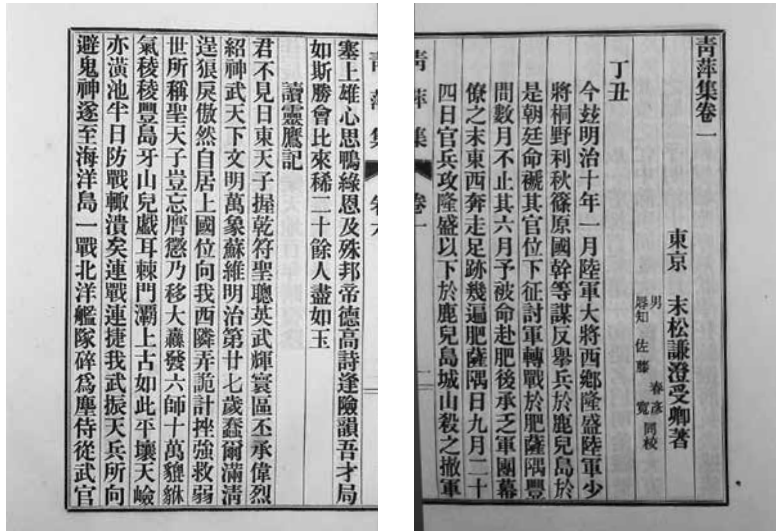
日清戦争を題材にとる漢詩選集。明治28年(1895)6月刊。柳井綱斎(1871～1905、名は碌、字は文甫)はジャーナリスト。備中高梁に生まれ、有終館より東京専門学校文科に進み、卒業後博文館に入社した。日清戦争に際し、戦争を美化する漢詩文が多く作られ、戦意高揚・世論形成に寄与した。『征清詩集』はこのような漢詩の選集として最も早く世に出た。巻頭には採録した漢詩の作者のリストが掲げる。



25. 高橋白山『征清詩史』1巻1冊
 (和p180下3)

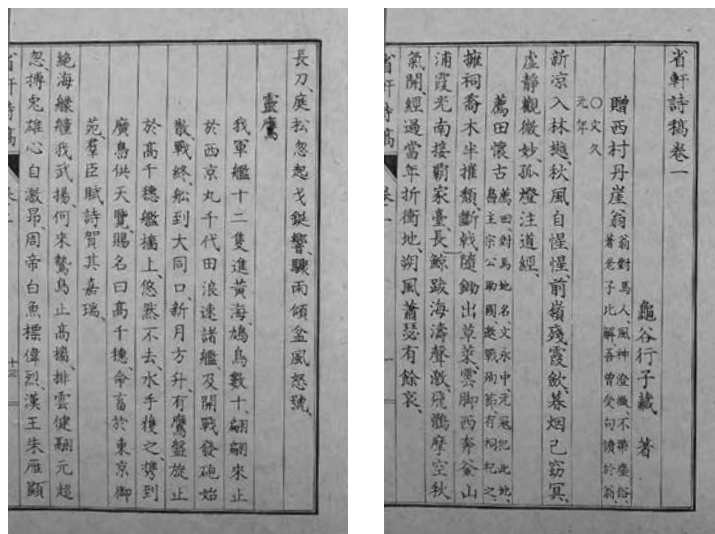
24. 小谷篤『征清雑詩』1巻1冊
 (和p124下3)

24は漢詩集。明治28年(1895)序刊。小谷篤(1837～1912、号は株菊)は備中砦部村出身の医師。25は漢詩集。明治30年(1897)刊。高橋白山(1837～1904)は教育者。自作の漢詩に自身のコメントをつける。三国干渉に対する怒りやシベリア鉄道完成への警戒心が覗える。



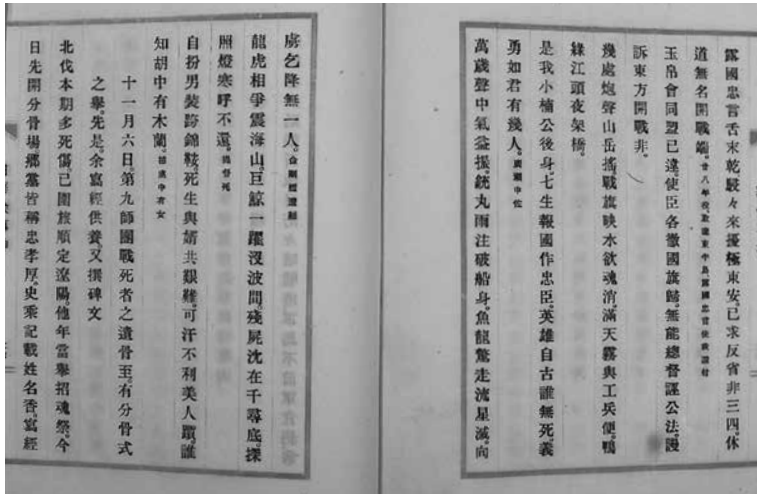
26. 末松謙澄「讀靈鷹記」(『青萍集』12卷2冊、和p161上2)

『青萍集』は官僚・政治家である末松謙澄(1855～1920、青萍は号)の漢詩文集。黄海海戦の折、軍艦高千穂のマストに止まった鷹が明治天皇に献上された。伊東巳代治(1857～1934)が「靈鷹記」を作り、これを神武東征の際に現れた金鵄に見立てると、多くの漢学者が「靈鷹」に関する漢詩文を著した。『青萍集』に収録される「靈鷹記」もその一つであり、黄海海戦における日本海軍の圧勝ぶりを強調する。



27. 亀谷省軒「靈鷹」(『省軒詩稿』2卷2冊、研10-7)

漢詩集。明治36年(1903)刊。亀谷省軒(1838～1913、名は行、字は子省)は対馬出身の官僚。明治27年(1894)10月24日付の東京朝日新聞朝刊によれば、靈鷹詩文は明治天皇が閲読するために献上された。日清戦争時には大本営が広島に設けられていたため、明治天皇が臨御して議会も広島で行われた。詩文の献上は旧広島藩庭春和園で行われ、この「靈鷹」もそこで献上するために作られたものか。

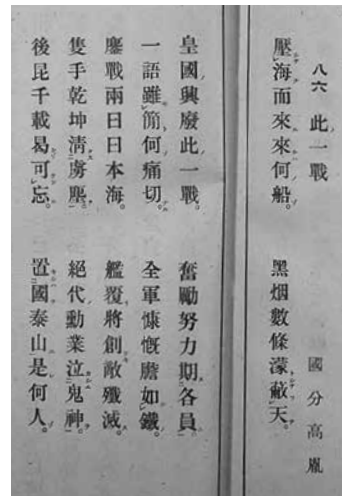


29. 松本白華『白華餘事』2巻2冊（新取資料）

大正5年（1916）刊本。松本白華（1839～1926）は加賀松任出身の僧侶で、幕末期に大坂で広瀬旭莊に学び、維新後は咸宜園出身者で結成された漢詩結社・玉川吟社および香草吟社に所属するかたわら、成島柳北らと海外視察をおこない、のちに上海別院輪番をつとめた。日露戦争では、北陸出身者で構成された第九師団は旅順・奉天の戦闘で多数の戦死者を出したが、本書ではその分骨式をうたった漢詩を収録しており、僧侶から見た日露戦争の様子がうかがえる。

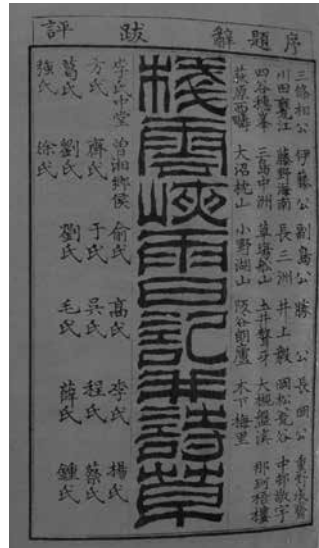
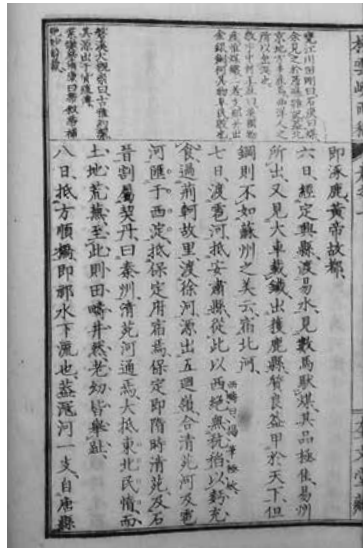


30. 宇野哲人編『新撰漢文読本』巻3
（教科書24）



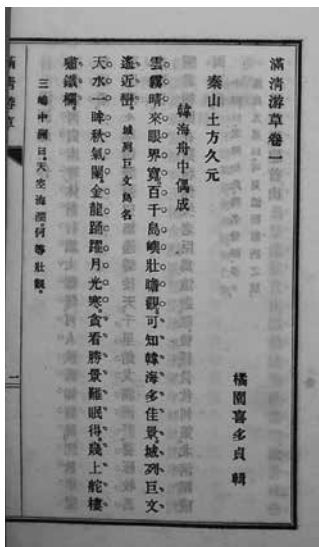
28. 高田真治編『新漢文 新制版』巻1
（教科書506）

28は昭和12年（1937）、大日本図書株式会社刊。国分高胤（号青厓）「此一戦」は日本海海戦（明治38年5月27・28日）をうたった漢詩で、有名な文言「皇国の興廢此の一戦にあり、各員奮励努力せよ」を盛り込んでいる。なお、本書では直前に依田学海「日本海海戦」を収録している。30は明治38年（1905）、学海指針社刊。台湾や中国の歴史・地理に関する教材を多く含む。

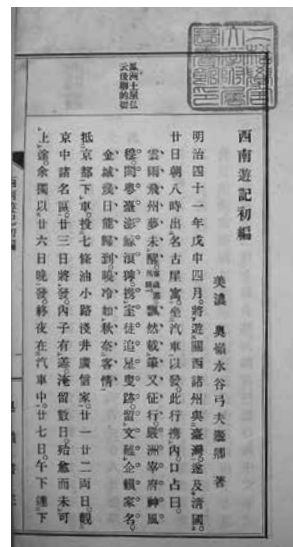


31. 竹添進一郎『棧雲峽雨日記』2卷2冊(芳野347)

清国の紀行文。明治中刊。竹添進一郎(1842～1917、諱は光鴻、号は井々)は肥後出身の外交官。木下犀潭(1805～1867)に学び、熊本藩の参謀として活躍、維新後は修史局・大蔵省国債局を経て外務省に勤める。本書は明治9年(1876)の旅の見聞を漢文で記し、伊藤博文や李鴻章など日中の政治家の好評を博す。清国の産業や交通運輸の発達、資源の分布を描くことに腐心しており、龍頭の評もそこに興味を示す。

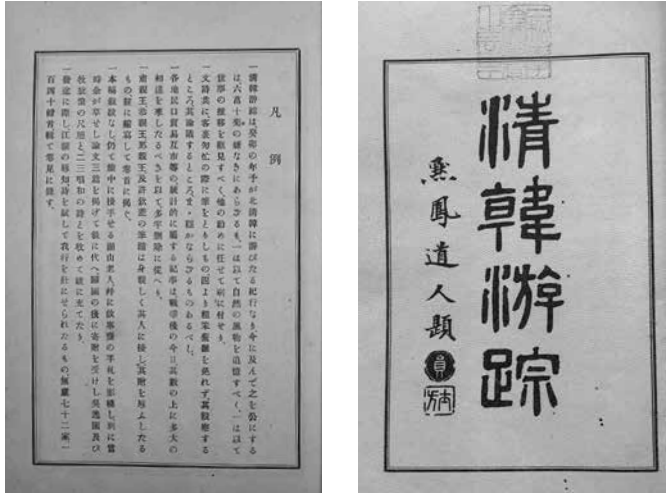


33. 土方久元『滿清游草』2卷1冊
(和 p172 下 3)



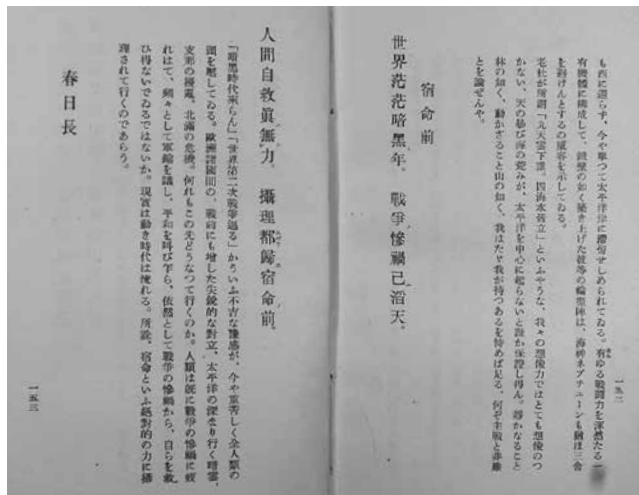
32. 水谷弓夫『西南遊記初編』1卷1冊
(和 p174 下 3)

32は台湾へ向かう途中、京都から門司への旅程を記した紀行文。明治45年(1912)刊。水谷弓夫(1848～1926、号は奥嶺)は教育者で美濃の人。33は中国旅行の旅を記した紀行文。明治39年(1906)刊。土方久元(1833～1918、号は泰山)は政治家で土佐の人。



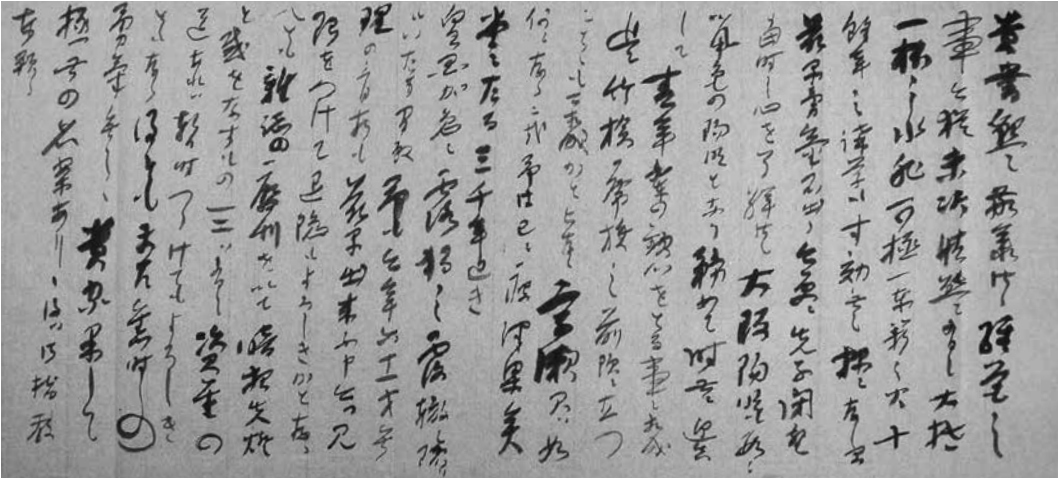
34. 上村才六『清韓游踪』1冊（和 p173 上 1）

清国と大韓帝国の紀行文。明治39年（1906）刊行。上村才六（1866～1946、号は売剣、別号に詩命楼）はジャーナリスト。陸奥盛岡出身。山崎鯤山（1822～1896）に学び、新聞雑誌の創刊・編集、少年言文一致会創立に従事した。凡例に刊行目的を「自然の風物を追憶すべく」と説明し旅中の詩を録するが、それは埋め草に過ぎない。眼目は両国の内情報告にあり、植民地化を見据えて値踏みするが如き記述が目立つ。

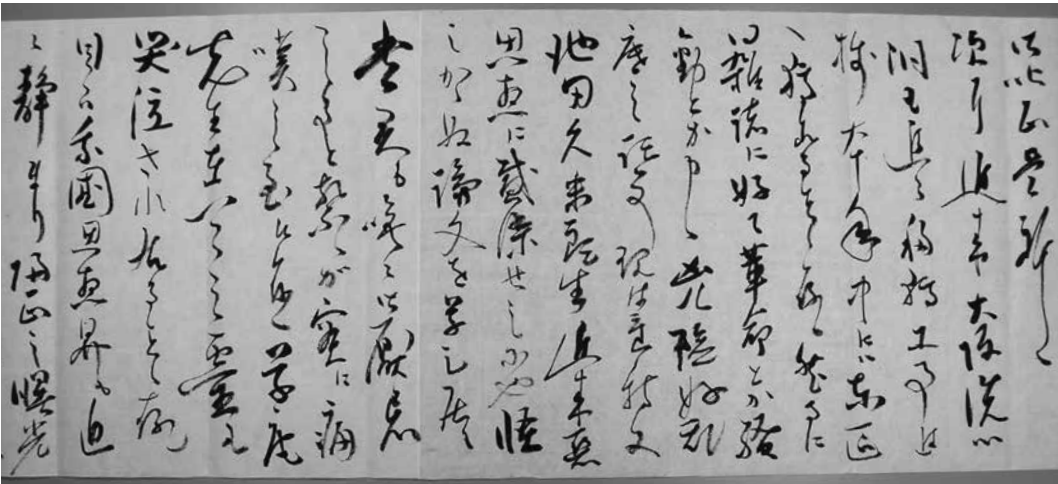


☆ 35. 木下彪『詩春秋』1冊

昭和7年（1932）、松雲堂刊本。主に満州事変・上海事変をうたった漢詩集。陸海軍の軍事行動を称讃する一方、これまでの日本外交を軟弱だとして批判し、軍縮会議や国際聯盟に対する不満や、日本国内の農村疲弊を述べている。しかしながら、「宿命前」では、欧州各国の対立、太平洋の暗雲、中国大陸・満州における動向を述べ、大戦前の不安な世相をうたっている。作者木下彪（1902～1999）は新聞記者で、のちに宮内省御用掛を経て、戦後、岡山大学に教鞭を執った。



36. 東敬治 山田準宛書簡（大正9年〈1920〉5月18日、山田F26-687）



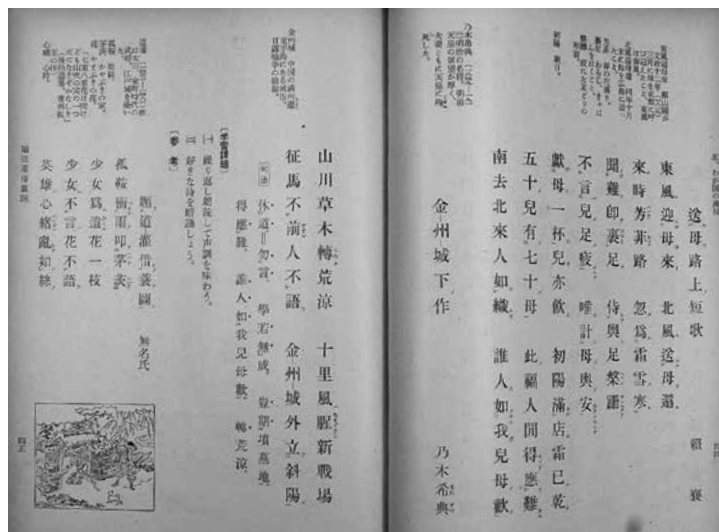
37. 高瀬武次郎 山田準宛書簡（大正9年〈1920〉8月23日、山田F22-571）

36・37は、発信者・受信者ともに明治・大正・昭和初期の陽明学者として著名な人物たち。東敬治（1860～1935、東沢瀉の男）は雑誌『陽明学』を刊行しその普及に努めた。高瀬武次郎（1869～1950）は京都帝大文科大学の支那哲学講座の教授。山田準（1867～1952）は山田方谷の養孫で、第七高等学校の漢文科教授。第一次世界大戦中のロシア革命・ドイツ革命の衝撃により共産革命思想の日本伝播への警戒が高まり、戦間期、漢学者たちの多くは「防共の思想的防波堤」として漢学振興を訴えた。大東文化学院や二松學舎専門学校の開校もこうした流れの中の動きである。



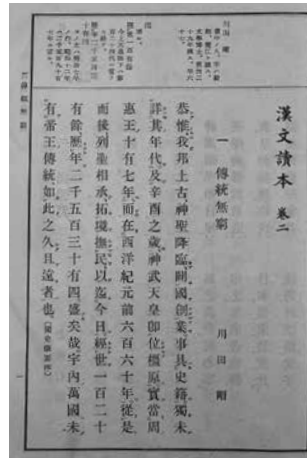
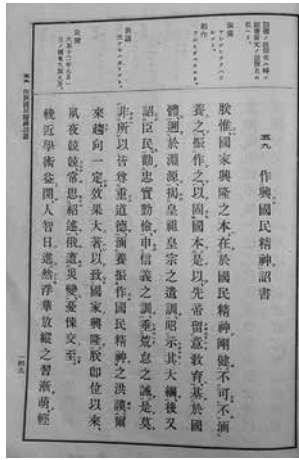
38. 大東文化協会編『皇国漢文読本』卷1（教科書 499）

昭和11年（1936）刊。凡例に「本書ハ時勢ノ要望ニ応ジ中等学校ニ於ケル漢文科ノ教育効果ヲ大イニ発揚センガ為ニ編纂セシモノナリ」と述べ、「国体精神ノ明徴」「徳育ノ拡張」「東洋思想ノ闡明」等を重視している。当時の時局（南進論）を反映したためであろうか、近世初期、日本人傭兵隊長としてシャムで活動した山田長政の功績をうたった斎藤拙堂「山田長政伝」や、安井小太郎「題寛永御朱印船図」を採録する。



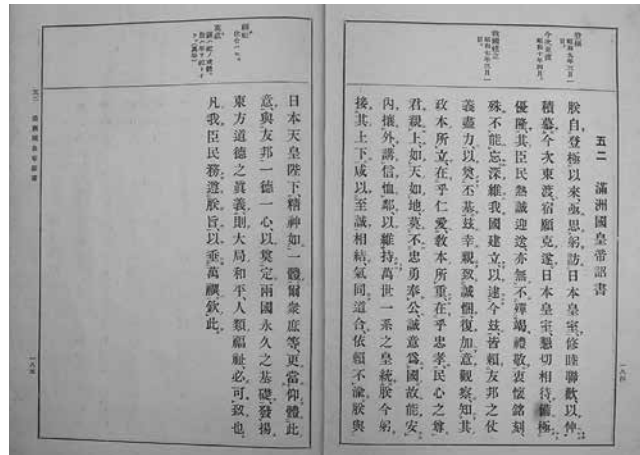
39. 塩谷温・松井武男編『新版精選漢文読本』卷1（教科書 534、535）

昭和33年（1958）、開隆堂刊。序言で「漢文は元来中国の古典であるが、また長くわが国の古典としても親しまれ、思想、言語はもとより、新旧の文化に広く深いつながりをもつものである」と述べ、中国人の漢詩を中心に採録しているが、「五 わが国の漢詩」に乃木希典「金州城下作」を採録する。戦前に本作を採録した漢文教科書は多数存在するが、戦後に刊行されたものとしては稀有な事例であろう。



40. 古城貞吉編『漢文讀本』（教科書 no. 不明）

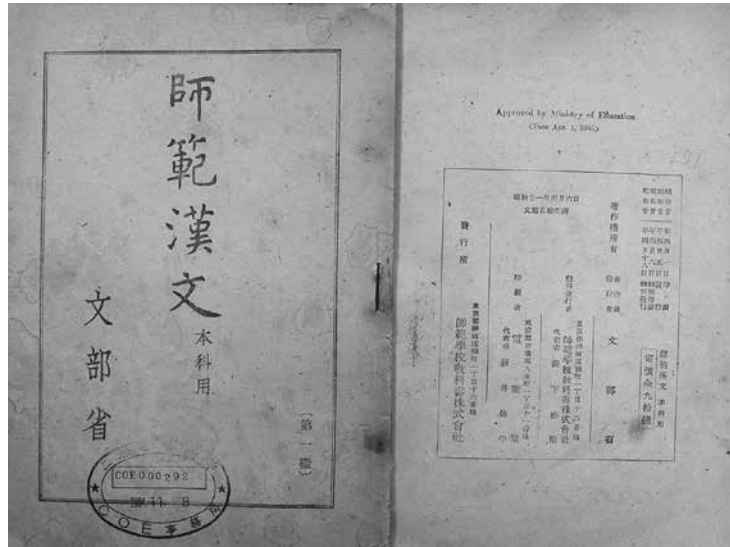
昭和12年（1937）、六星館刊。「作興國民精神詔書」は、「國民精神作興ニ関スル詔書」（國民精神作興詔書、大正11年11月10日）を漢文にしたもの。これは、関東大震災直後に出されたもので、天災や共産主義の擡頭に対し國民精神の振興を呼びかけた内容となっている。本書をはじめこの時期に刊行された漢文教科書は、冒頭に漢文で書かれた教育勅語を掲載しているものがある。



41. 加藤虎之亮「滿洲国皇帝詔書」

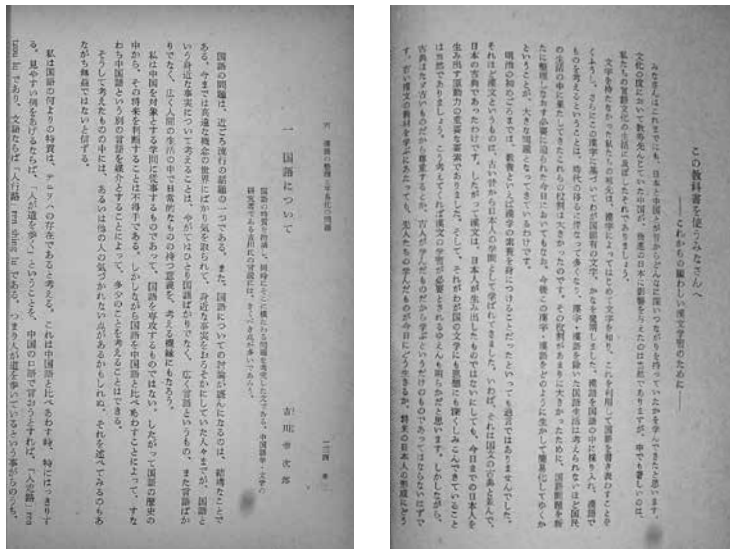
（『皇国漢文 新制版 卷4、教科書254、255）

昭和12年（1937）、啓成社刊。「滿洲国皇帝詔書」は、昭和10年（1935）4月に溥儀が日本を訪問し、帰国後に渙発した「回鑾訓民詔書」（康徳2年5月2日）であり、和文と漢文とがある。本学出身の佐藤知恭（1877～1944、号は胆斎）は、満州国國務院総務庁に勤務し『回鑾訓民詔書衍義』（昭和11年）を著している。本書は「皇国漢文」を銘打っているが、中国人の漢詩文を多数採録しており、日本人は那珂通世・副島種臣・後藤世鈞の3名のみである。このほか、顧炎武・曾國藩ら清末学者の文章も収録しており、校勘学者である加藤の選択眼がうかがえる。なお、加藤は『皇国女子漢文』（中等学校教科書株式会社、昭和13年）教科書も編纂している。



42. 文部省『師範漢文 本科用』(教科書 no. 不明)

昭和21年(1946)刊。敗戦翌年に刊行された漢文教科書で、紙質が悪く29頁と比較的薄い。敗戦の影響からか、収録するテキストは『孟子』『論語』など朱註をはじめとする中国のものが比重を占め、日本人のものは伊藤維楨・貝原篤信・佐藤坦の3人のみである。占領下にあったため、英語により「文部省検定済」と書かれている。

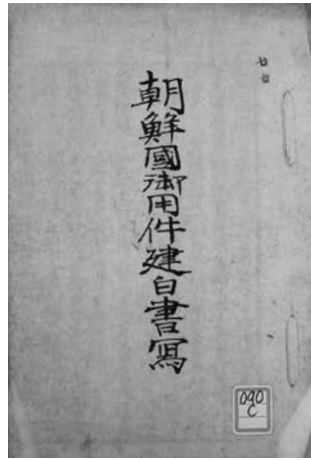


43. 三省堂編集所『高等漢文 三』(教科書 501)

昭和28年(1953)、三省堂刊。冒頭に関係者の氏名を記し、「この教科書を使うみなさんへ」で、漢文を学ぶ意義や本書の特徴について述べている。また、「六 漢語の整理と平易化の問題」として、吉川幸次郎「国語について」および朝日新聞記者・園田次郎「新聞文章の平易化」を収録する。園田は「現代かなづかい」「当用漢字」について説明を加える一方、平易化の障害・当用漢字の欠陥などについて述べており、漢文教科書としてはユニークである。末尾に「新旧字体対照表」「(中日文化交流)年表」・「現代中国地図」を掲載する。

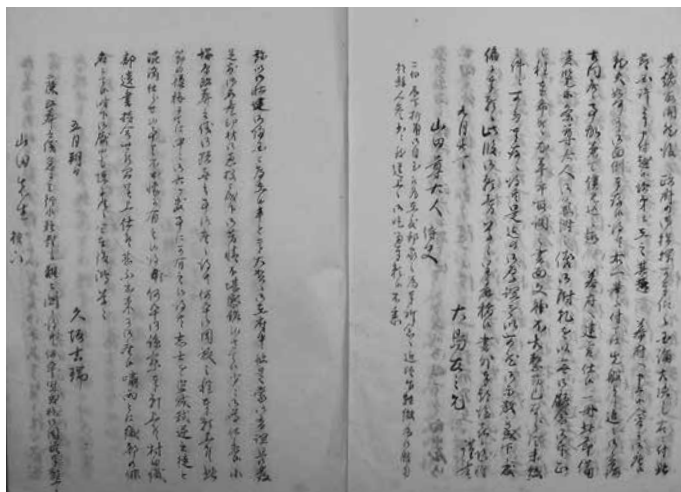
V 山田方谷の対外認識と国体論

— 大島友之允との交流



44. 大島友之允『朝鮮国御用件建白書寫』写本仮綴1冊 (元治元年〈1864〉10月、三島 no. 不明)

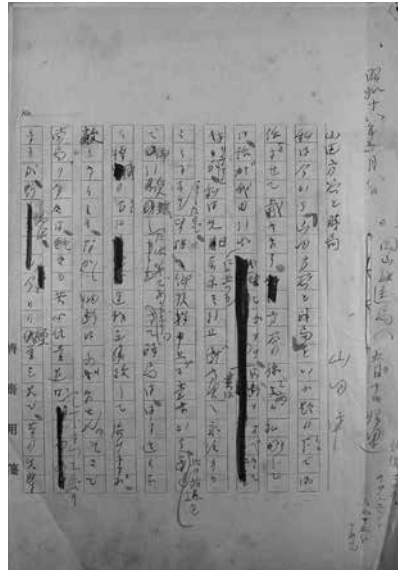
三島中洲の師山田方谷（1805～1877）は本来、開国交易論者であったが、幕府一致体制創出のために攘夷決行を主張。しかし開国止む無しと孝明天皇が勅許するや、欧米勢力の一方的な迎入れではなく、武力行使を恐れず対外侵出することを主張した。文久3年に桂小五郎の紹介で面会した対馬藩の大島友之允とは朝鮮攻略をめぐる議論し、大島は本書に見える「両国交際之規則を改」「勉而彼民心を服ス」「両国之禁を破」「彼我之物産を開」「神州之武威勇気を示ス」「清国之商路を開」「大ニ海軍を興起ス」の七策を幕府に建白した。展示品は大正期頃の写本。



45. 大島友之允書簡

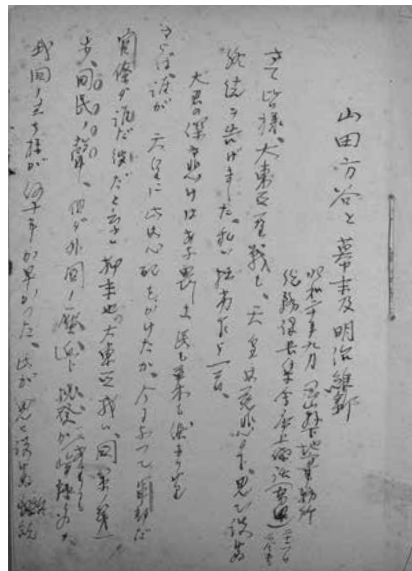
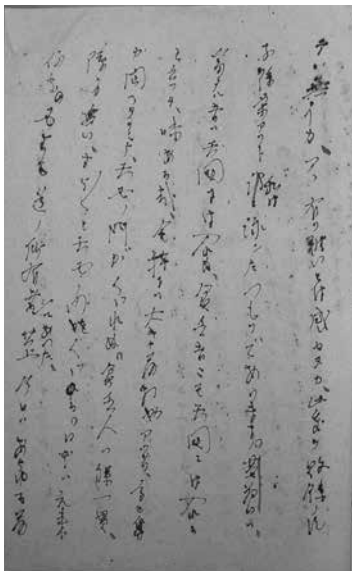
（『山田方谷先生へ諸家よりの手簡写』、大正5年〈1916〉9月筆写、三島 no. 不明）

書簡から、大島が幕府への建白書作成に当たって山田方谷に意見を求めていることがわかる。展示資料は、山田家に所蔵する著名諸家から方谷への来簡を、山田準から三島復（1878～1924、中洲三男）が借出して筆写したもの。



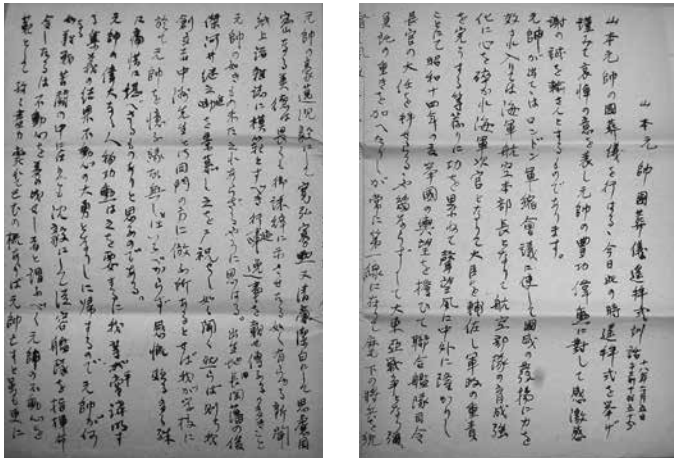
46. 山田準「山田方谷と時局」

（昭和 18 年〈1943〉6 月 8 日、岡山放送局ラジオ講演、山田 F85-2678）



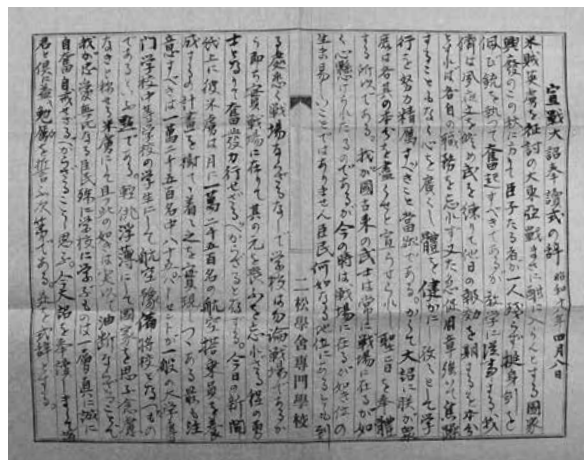
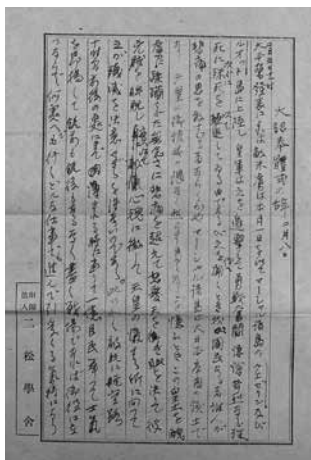
47. 山田準「山田方谷と幕末及明治維新」（昭和 20 年〈1945〉9 月 22 日、岡山県地方事務所総務課長集會、於高梁公会堂、山田 F85-2674）

第二次大戦中と敗戦後の山田準による山田方谷に関する講演原稿。一貫して幕末維新期の方谷の思想・行動を「国体」と絡めて説く傾向が見られ、戦時下には戦争遂行を肯定する趣旨の講演が多い。敗戦を経ても準の方谷論は殆ど変化していないが、昭和 20 年 9 月 4 日開会の第 88 議会開院式の勅語の言葉を引用して、「道義立国」こそ戦後日本の指導精神であるとし、敗戦は「道義立国」のためにむしろ幸いであったと述べているのが注目される。



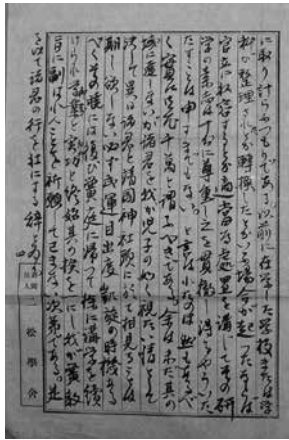
48. 那智佐典「山本元帥国葬儀遙拝式訓話」
 （昭和18年〈1943〉6月5日、那智F58-1681）

連合艦隊司令長官山本五十六（1884～1943）はブーゲンビル島上空で襲撃され戦死（1943.04.18）。その死は一か月後に公表され、6月5日に日比谷公園で国葬が執行された。二松學舎では国葬の時刻 10:50 に合わせて遙拝式を行った。山田準校長の引退により昭和18年に第2代校長となった那智佐典は、長岡出身の山本が同郷で山田方谷門下の河井継之助を敬慕していたことから、二松學舎において山本を追憶することは縁故があると訓話している。



49. 那智佐典「大詔奉戴式辞」(昭和18年〈1943〉4月8日、同5月8日、
 昭和19年〈1944〉2月8日、那智F58-1678・1684)

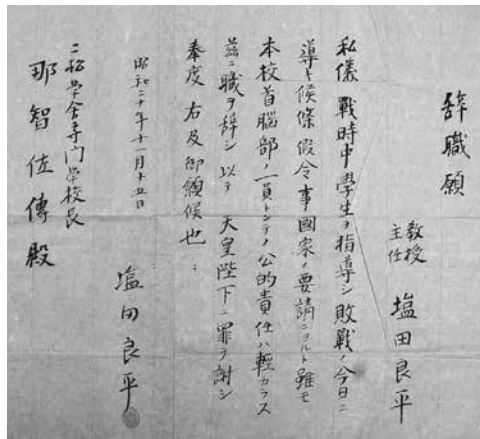
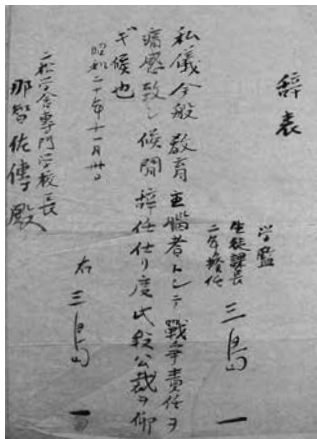
太平洋戦争完遂のために昭和17年1月から終戦まで、開戦日（昭和16年12月8日）にちなんで毎月8日が大詔奉戴日と定められ、学校等では式典が行われた。昭和18年4月8日の式辞では那智校長は、米国の航空搭乗員の学歴の高さを指摘し、油断すべきでないことを述べる。昭和19年2月8日の式辞では、2月5日の大本営発表にもとづきマーシャル諸島への米兵上陸を伝えている。



50. 那智佐典「(学徒出陣) 壮行会辞」(昭和 18 年〈1943〉10 月 19 日、那智 F59-1690)

学徒出陣とは、戦局悪化にともない理工系と教員養成系以外の文科系高等教育諸学校の在学生の徴兵延期を廃止して、徴兵検査合格者を入隊させたこと。昭和 18 年 10 月 21 日、明治神宮外苑競技場で東京・神奈川・埼玉・千葉の大学・高等専門学校・師範学校の学徒を対象とした第 1 回学徒出陣の壮行会が文部省学校報国団本部の主催で挙行された。前々日に学舎内で開かれた壮行会で、那智校長は「愈々の時には潔く身命を捧ぐることは極めて易々たる訳だが、堅忍不拔剛健沈毅にして始めて尽忠国恩に報い奉るを得」、「決して異日諸君を靖国神社頭に於て相見することは期し欲しない」と語りかけ、学生の生還と復学を祈った。戦時下の二松学舎が「リベラル」であったと言われる一端が垣間見える。

敗戦後の状況

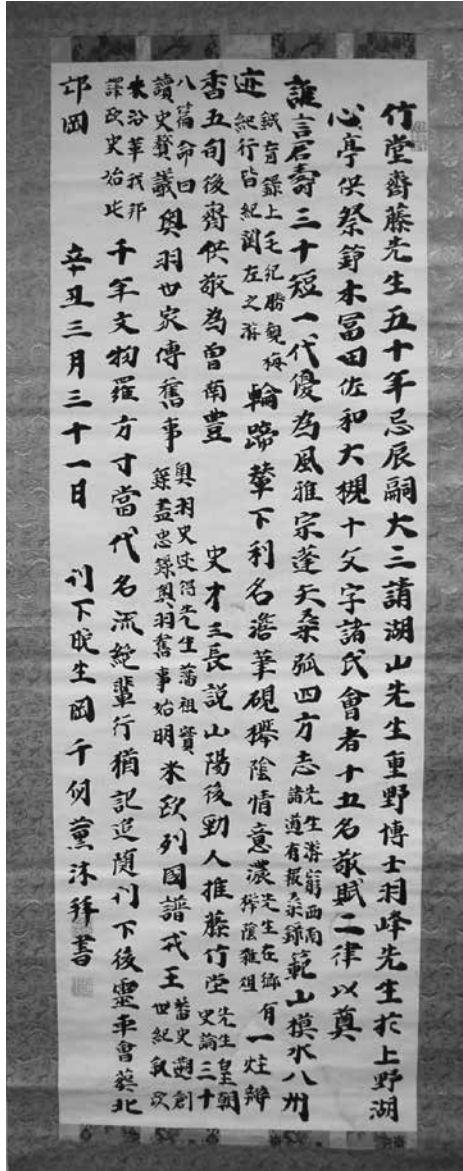


51. 塩田良平・三島一の辞表 (昭和 20 年〈1945〉11 月、那智 no. F55-1568・1569)

昭和 20 年 3 月 10 日の大空襲で校舎を焼失した二松学舎専門学校は、代々木のキリスト教会堂に移転し、旧校地への校舎新築は同 22 年 11 月、新制大学への昇格は同 24 年春。校舎焼失から新築までの詳細は『那智佐典日記』を参照のこと(『三島中洲研究』vol.3)。理事・教授の塩田良平(1899～1971)と三島一(1897～1973、中洲の長男桂の長男)が那智校長に提出した辞表には、戦争責任や天皇陛下への謝罪の文字が見えるが、背景には理事者間の意見対立があった。

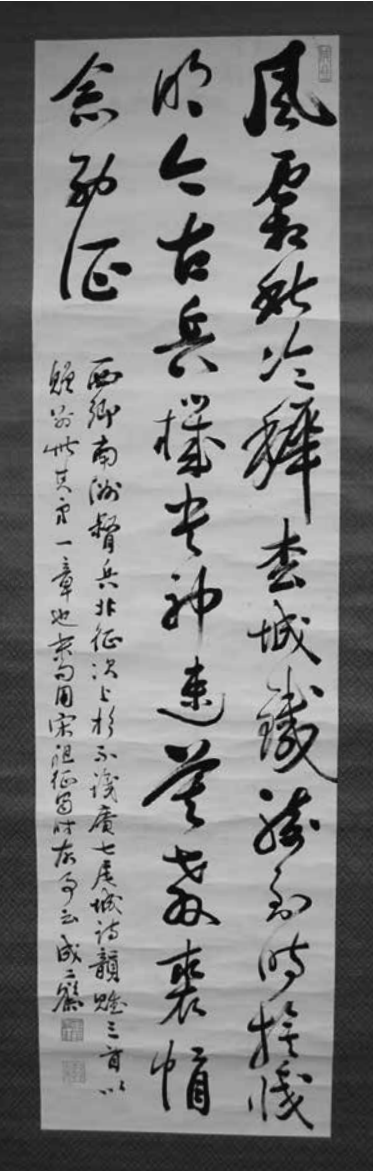
VII 対外戦争・対外危機等を詠じた詩文とその書

☆52. 岡千仞書幅「斎藤竹堂五十年忌辰二律」(明治三四年(一九〇一)三月三一日)



仙台出身の斎藤竹堂(1815～1852)は昌平坂学問所に学び、一時、藩校養賢堂でも学を講じ、早い時期に『鴉片始末』『蕃史』など海外事情を紹介する著作を著した儒者。展示品は養賢堂で斎藤竹堂に学んだ岡千仞が、その50年祭に当たって詠じた律詩二首。岡は明治以降、中国との関係を深めていくが、その根底には旧師竹堂以来の対外認識があったと思われる。

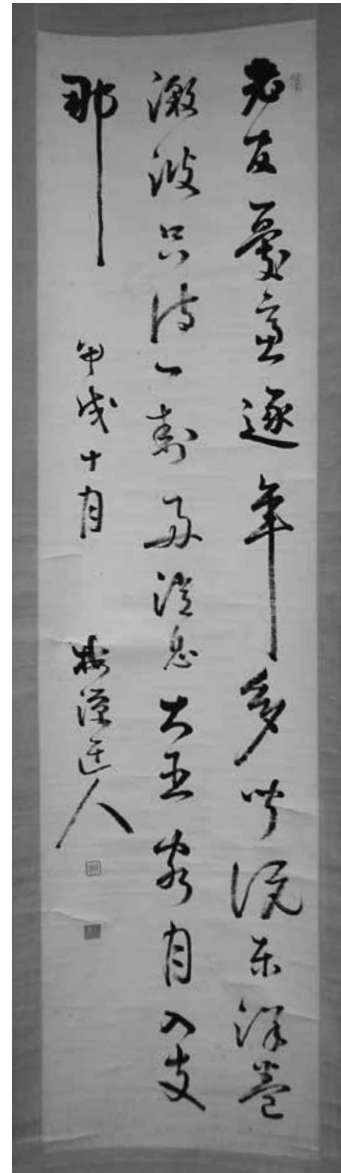
☆53. 重野安繹書幅「西郷南洲督兵北征贈別三首之一」(明治元年(一八六八))



「風霜秋冷釋松城 鐵騎到時旗幟明 今古兵機貴神速 莫教裘帽念西征」
西郷南洲督兵北征、次上杉不談庵七尾城詩韻、賦三首以贈別。此其第一章也。末句用宋祖征蜀時故事云。

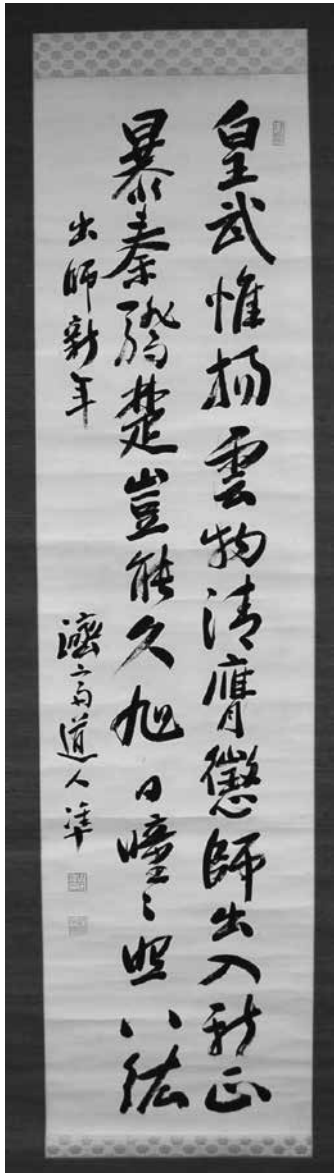
歴史学者・漢学者として知られる重野安繹(1827～1910、号成斎)が、戊辰戦争に従軍して東北に向かう西郷隆盛に贈った送別詩。重野と西郷は同じ薩摩藩士で、奄美大島の流刑時代に知り合った。上杉謙信の七尾城での漢詩に次韻した作で、第1首目は天皇に戦地の兵士の苦勞に想いを馳せさせることがないように、速く戦果を上げて帰還してほしいと詠ずる。

☆54 杉浦梅潭書幅「甲戌十月」（明治七年（一八七四）一〇月）



「老臣憂慮逐年多 聞說東洋卷激波 只待一封好消息 大臣客月入支那」

☆58 山田準書幅「出師新年」（昭和一三年（一九三八）一月）



「皇武惟揚雲物清 膺懲師出入新正 暴秦驕楚豈能久 旭日曠々照八紘」

山田準の二松學舎専門学校長の在任期間（昭和3～18年）、濟南事件、張作霖爆殺、滿州事変など日中関係は悪化の一途をたどり、昭和12年（1937）7月の盧溝橋事件を発端に全面戦争に突入。同12月には日本軍は中華民国の首都南京を攻略。本詩は暴驕な中国軍を日本軍が懲らしめると詠ずるが、「皇武惟揚」「膺懲」は三島中洲『三役三凱』（1916年）の自序に見え、日本の対外戦争に関する山田の認識は中洲の延長線上にあったと言えそうである。

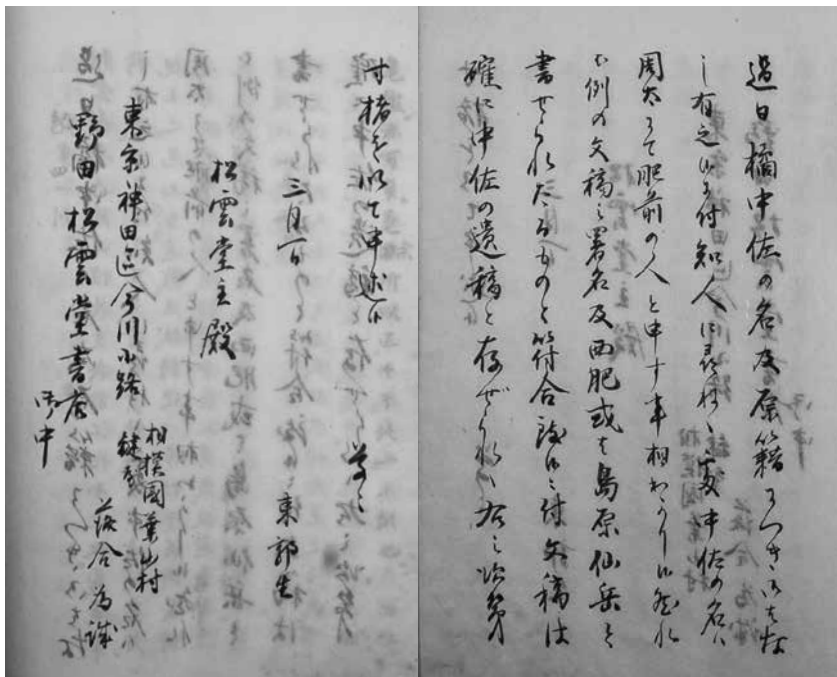
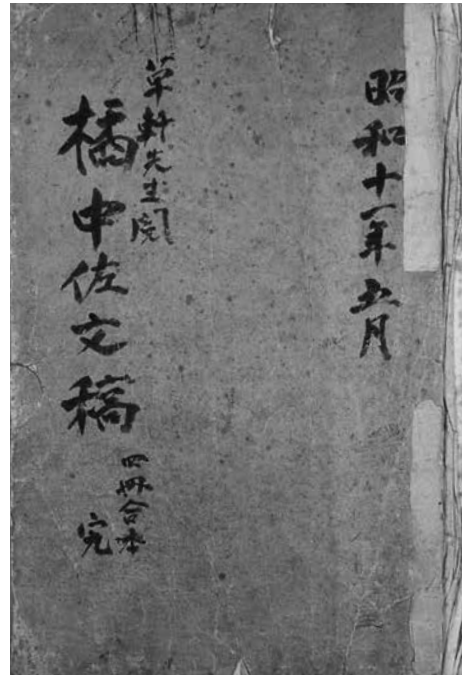
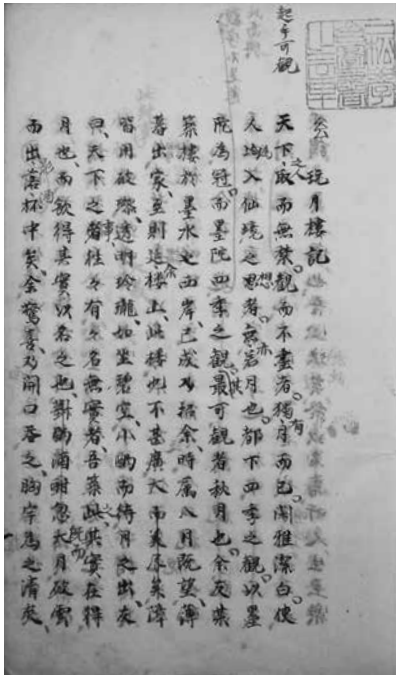
杉浦梅潭（1826～1900、通称正一郎、名は誠）は幕末明治初期の幕臣・官僚。学識に優れ大沼枕山門下の漢詩人としても知られた。中洲の主君板倉勝静が老中首班の時に目付に抜擢され、慶応～明治10年まで主に函館（箱館）にあって、箱館奉行・北海道開拓使権判官として日露交渉に当たった。展示品は、明治7年の台湾出兵（漂着琉球漁民の殺害事件の捜査目的）のあと、大久保利通が全権弁理大臣として9～11月に北京に赴きその外交交渉に臨んでいることを詠じた自作の漢詩幅。

55. 三島中洲撰「陸軍歩兵中佐橋君原墓碑」拓本

(日下部鳴鶴書、奥保鞏篆額「軍人龜鑑」、法人掛軸卷子〇〇三九)

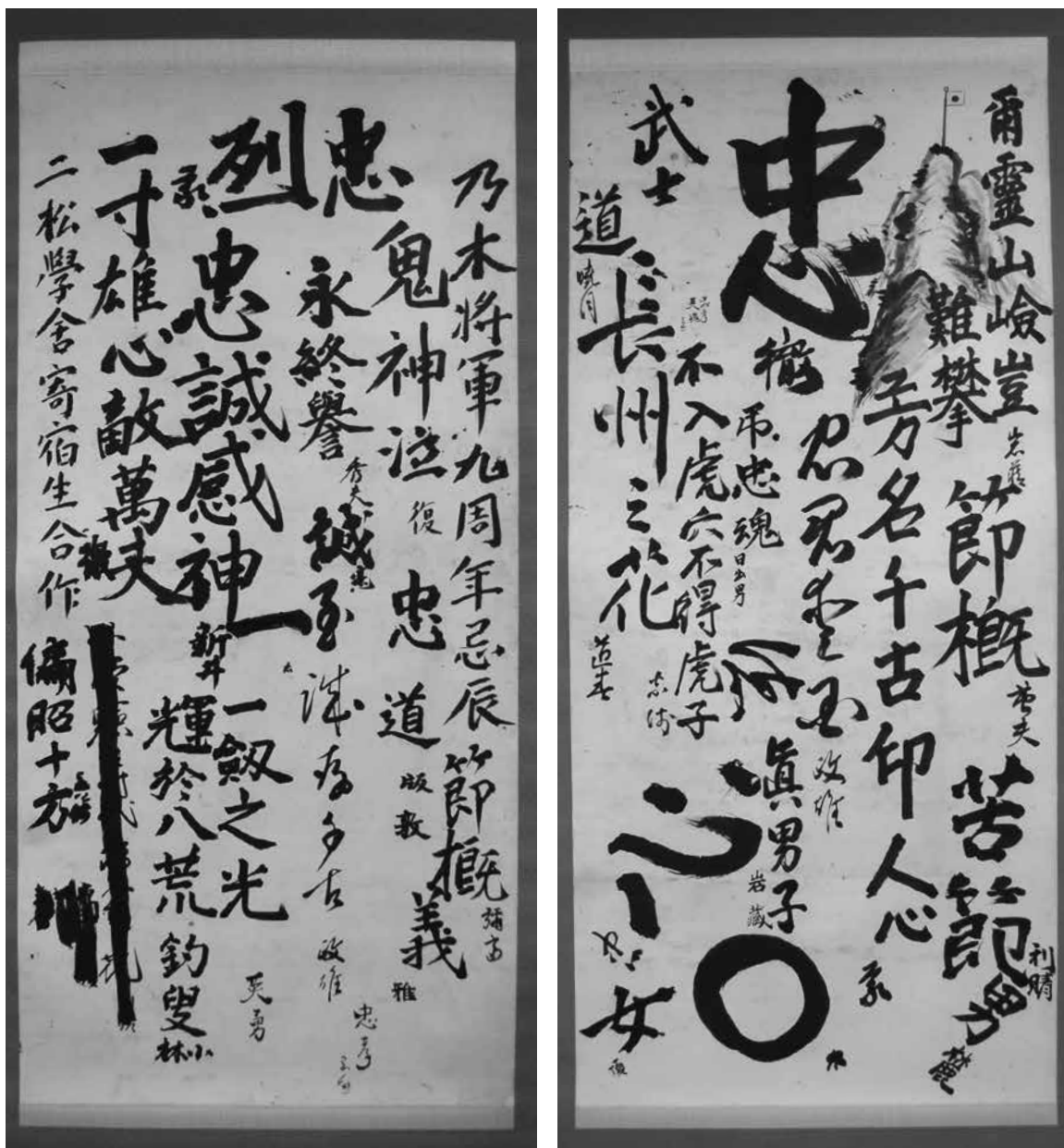


橋周太(1865～1904)は肥前国千々石村(島原半島西部)の出身で、長崎中学を経て上京し、明治13年に二松學舎に入学。翌年、陸軍士官学校に合格し、幼年学校(1881～84)・士官学校(84～87)を卒業(旧9期)。日露戦争に従軍し、歩兵第34連隊第一大隊長として遼陽會戦に参加し、8月31日に首山堡の攻防で戦死。東宮武官として少年時の大正天皇に近侍(1891～96)した経験をもつ橋は、死の直前に東方を拝して、皇太子の誕生日であるこの日に奮戦して思い残すことはないと言ったとされる。海軍の広瀬武夫中佐とともに軍神として神格化され、軍歌にも唱われた。この碑は名古屋市内の陸軍墓地に建てられていたが、現在は千種区の平和公園内に移っている。



56. 橋周太『文稿』4卷（大正9年〈1920〉4月筆写、三島107）

中洲が碑文（展示品55）の中で「素有文学」と評する如く、橋周太は漢学を好み、名古屋地方陸軍幼年学校校長を勤めた時代には自ら漢文を講じたこともあった。本書は陸軍士官学校幼年生徒時代の橋が学業の一環として取り組んだ漢作文の文稿で、明治15年3月から同17年6月までの作を取める。展示品は三島復が古書肆松雲堂の主人野田文之助から原本を借りて妻美代に写させたもの。野田は熊本出身の侍講落合為誠（1866～1942、元田永孚外孫）に依頼して、本書が橋周太の遺稿であるかどうかを審定してもらっている。



57. 二松學舎寄宿生寄合書二幅「乃木將軍九回忌辰合作」

(大正9年〈1920〉法人 掛軸卷子 0094、0095)

乃木希典（1849～1912）の大正元年（1912）9月13日の自決が当時の日本人に大きな衝撃を与えたことは周知のとおり。乃木は漢詩にも優れ、その「金州城下作」等は漢文教科書にも採られて愛唱された。展示品は二松學舎の寄宿舎で乃木の命日に開かれた追悼会席上での寄せ書き。寄宿生だけでなく、舎長三島復や相良政雄講師ら教員も参加していることが分かる。

編集後記

当初、企画展「三島中洲と近代」は二〇一三～二〇一五年の三年間の予定で始めたが、今年度も附属図書館と大学資料展示室運営委員会からの要請があり、「其四」の展示を企画し、図録を作成することになった。好評をいただき、ありがたいことである。▼二〇一五年度から本学では、筆者が研究代表者となって応募した私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、「近代日本の「知」の形成と漢学」プロジェクトを推進中である。プロジェクトの内容と深い関係があるこの企画展は継続してもよいという思いもあった。今回は敢えて「戦争と漢学」に焦点を当ててみた。忌憚のないご意見を賜りたい。▼展示と図録作成に当たっては、年度末・年度初の繁忙期にもかかわらず、館長をはじめとする図書館諸氏、丸善雄松堂の山崎和正氏に多大なご協力をいただいた。あらためて謝意を表したい。▼このたびの企画展に合わせて、六月四日（土）には本学文学部中国文学科の田中正樹教授による講演会も予定している。大勢のご来聴をお願いしたい。

二〇一六年四月二〇日

文学部教授・大学資料展示室運営委員 町 泉寿郎

三島中洲と近代 其四

—小特集 戦争と漢学—

発行日 平成二八年五月二〇日

編集者 大学資料展示室運営委員会

発行者 二松學舎大学附属図書館

〒一〇二―八三三六

東京都千代田区三番町六一―一六

印刷製本 株式会社サンワ

(非売品) 二〇一六 ©

